

## 平和による専制政治

### 一仮面劇『アルビオンの勝利』の記念画としてのアントニー・ヴァン・ダイク作 《チャールズ一世とヘンリエッタ・マライア王妃》

小笠原 美果 (政治経済研究所)

画家アントニー・ヴァン・ダイク (1599-1641) は、17 世紀のイギリス肖像画史に画期となる数々の作品を残した。なかでも、渡英直後の 1632 年に描かれた《チャールズ一世とヘンリエッタ・マライア王妃》(クロミェルジーシュ宮殿所蔵) は、首席公式画家としての地位を確立させた作品である。ただし、この二重肖像画は、既に公式画家として活躍していたダニエル・メイテンス一世(c.1590-c.1647/48) による同名の作品を踏襲して描いたものだった。ヴァン・ダイクは、メイテンスの作品の構図を借用しつつ、いくつかの変更を加え、作品を完成させたのである。本発表の目的は、ヴァン・ダイクによる変更がいかなる意図のもとになされ、どのようなメッセージを発信するために描かれたのかを明らかにすることである。

美術史家オリバー・ミラーは、エックス線写真を用い、メイテンスによる《チャールズ一世とヘンリエッタ・マライア王妃》のなかの王妃の肖像部分が、ヴァン・ダイクの描いた王妃像に似せて描き直されていたことを示した。ロイ・ストロングは、当時の文化的、思想的背景と二人の画家の作品について紹介した。最新の研究として、ジョン・ピーコックは、二重肖像画が王と王妃が主演した仮面劇『アルビオンの勝利』の場面を絵画化したものであることを指摘した。以上の研究により、両作品の関係を明らかにする作業は一定の進展を見せたといえよう。しかし、両作品を取り巻く背景を視野に入れつつ、ヴァン・ダイクによる「描き直し」の意図を明らかにする分析は、いまだ十分になされているとは言い難い。

本発表では、二重肖像画が『アルビオンの勝利』の記念画として描かれたことを踏まえ、仮面劇との関係を検討するとともに、王の先祖にあたる王族の肖像画との関係を考察する。その際、肖像画のみならず、劇の台詞や舞台装置、登場人物の服装について論究し、チャールズ一世のコレクション目録や王室公文書も利用した。結果として、ヴァン・ダイクの肖像画は、チャールズ一世のイメージ政策と密接に結びついていたことが明らかとなった。王妃の白地のドレスにカーネーション色のリボンと頭飾りは、仮面劇に因んでいると同時に、先の王族の女性肖像画に倣うものだった。その王妃のリボンと呼応しあうかのように、ヴァン・ダイクが王の服をカーネーション色に改変したのは、この色が仮面劇において平和の擬人像に用いられた色だったからである。チャールズ一世は、仮面劇を通じて、専制君主としての自身の権威強化に努めていた。ヴァン・ダイクは、そうした王の意図を汲み、いわば広告塔としての王と王妃をプロデュースした。そして王やその子供たちの正統性を示し、平和による専制政治を行う王というイメージを絵画化したのだった。